

## オルフェの庭から 26



6月のオルフェ・クラスでは、ヨハネ祭をテーマに行ないました。

会の中では、火と光と～ヨハネ祭と梅雨～の資料を元に、主として、キリスト教の伝統のある西洋の「火」の祭りとして、この時期、梅雨があり、田植えや豊作祈願など「水」にかかわる行事の多い日本の祭りとの対比に力点があり、太陽が最高点に達する夏至の日を祝う古代の夏至祭りと洗礼者ヨハネとの関連についてはあいまいなままでした。

ところが、会の中で芝山さんより鈴木一博氏の愛弟子で言語造形家の諏訪耕志さんのブログの一部を少しご紹介いただきましたが、終了後に

ブログの全文、こころのこよみ「第12週」～ヨハネ祭の調べ～を読みましたら、そのあたりのもやもやが一気に晴れ、目の開かれる思いがしました。

『キリスト教以前には、夏至を一年の頂点として、熱狂的に祝われていた古代の夏至祭り・・・。

洗礼者ヨハネは、その古代的宗教・世界観から全く新しい宗教・世界観へと橋渡しをした人として、位置づけられています。そして、ヨハネ祭は、もはや、熱狂的に我を忘れて祝う古代の夏至祭りではなく「意識的に、我に目覚めて、キリストを探し求める祝いである」と明言されています。

シュタイナーを理解するに欠かせないこのキリストを真に理解することは、私達のこれからの課題だと思いますが、「生活の中で、からだところを一杯使って働き、汗を流し、学び、歌い、遊ぶ・・・それらの動きの中でこそ、見出すことができるのでは？」という促しには深くうなづくところです。

そのような目覚めた意識で、もう一度、魂のこよみ第12週を、そして会の中で歌った「聖ヨハネのかがり火」の3番♪「さあ歩もう、太陽のくにを、新しいいのちの道を歩もう」(E.Schallar 詩 / 山本典子訳詩) という歌詞を読むと、新しい輝きをおびて私たちにせまってくるのではないのでしょうか？

諏訪耕志さんの～ヨハネの調べ～は簡潔にしてどこも省くことはできません。どうぞ全文をお読みになってみて下さい。(ヨハネ祭 で検索するとヒットします。) のんのん

### ~~~~ 『魂のこよみ』ルドルフ・シュタイナー 第12週 ~~~~

#### ヨハネ祭の情景<6月24>

世界の美しい輝きが  
深い魂の底に生きる  
私のなかの神なる力を  
果てしない宇宙の彼方へと解きはなっていく。  
私自身から私は離れ  
信頼を持ってただひたすら  
私自身を探しつづける。  
世界の光のあたたかさのなかで。  
(鳥山雅代訳 水声社刊)

#### ヨハネ祭の気分<6月24日>

世界の美しい輝き、  
その輝きが わたしの命に 宿る  
神的な諸力を 魂の底から 解き放ち  
宇宙へと 天翔けらせる。  
わたしは 自分を 後にして  
信頼しつつ ただ みずからを  
宇宙の 光と熱の中に 探しもとめる。  
(秦 理絵子訳 イザラ書房刊)

#### ヨハネの季節<6月23日～29日>

万象の美しい輝きが  
魂の奥底に生きる神々の力を  
宇宙の果てまで解き放つ  
私はおのれ自身から離れ去る。  
そして信頼をこめてふたたび私を  
宇宙の光と熱の中に求める。

(高橋巖訳 イザラ書房刊) 現在、ちくま文庫から出版。